平成２５年度「重点研究費」研究成果報告書

研究課題	教員養成カリキュラムと教師の専門職性の研究

研究代表者

氏名	所属	職名
浅沼　茂	教育学	教授

研究分担者

氏名	所属	職名
佐々木　幸寿	教育学	教授
橋本　美保	教育学	教授
古屋　惠太	教育学	准教授
遠座　知恵	教育学	准教授
末松　裕基	教育学	講師
戸田　孝子	教育学	講師

【研究成果の概要】　（文字の大きさ９ポイント・字数 800 字～1600 字程度）

本研究の課題「教員養成カリキュラムと教師の専門職性の研究」は、アメリカを中心に各国の教員養成のカリキュラムの実態を比較調査するものである。現在の教職大学院は、学校現場において教師の力量を高めることを目指している。その原型は、リンダ・ダーリング・ハモンド（スタンフォード大学）のように、大学ではなく、学校の現場に長期間にわたり、教育実習生が滞在し、授業の実践を教師の専門的なスキルを観察し、その卓越性から学ぶというものであった。日本の教職の専門性は、板書に始まり、方法的な側面でのスキルの向上に大きな重点が置かれている。それに対して、アメリカは、教材も含め、カリキュラム内容の構成の工夫に多くの時間が割かれている。日本では、教師の発問は、すでに与えられた教材や単元の枠の仮名で工夫されることが多い。しかし、米国における教師の専門職性は教材の選択から、全体の構成にいたる、カリキュラム内容に力点が置かれている。細部にわたるきめ細かな注意と助言については、日本の教師は多くの時間を割いている。それに対して、アメリカの教師は、教材の提示と子どもたち自身の理解の構成に多くの関心がある。それは日本の子どもたちが暗記的な知識やスキルにたけているのに対して、アメリカの子どもたちが物事の発想と理解と原理の応用に優れた成果を上げていることにその違いが現れている。

教職の専門職性とは何かという議論は、戦後、教職の学歴資格が大学卒を求めるようになってから盛んになり、その内実は、一般教養の延長として考えられることが多かった。このような議論の本筋のすり替えは、現在の教職の専門性を強調する立場からは受け入れられず、教員養成と文学部的な教養主義とを混同した学問的専門性を専門職性であるという論理が財務省には通用しなくなっている。したがって、方法としての専門性に対して、内容において学問的な卓越性を強調するならば、内容としてのカリキュラムについて工夫をするという学問の本来の出発点に戻ってその再生を図ることが肝要と言える。このことがアメリカのカリキュラムの工夫から、日本の学問的な教養主義が学ぶべき点と言える。

研究成果発表方法

［発表論文名（口頭発表を含む），氏名，学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入する。］

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。

研究成果については、平成26年9月に開催される日米教員養成協議会年次大会において口頭発表する予定である。また、カリキュラム学会などにおいて、その成果を応用し、発表する予定である。